

STEINWAY & SONS®



スタインウェイ“デザイン”のピアノ。

“可能なかぎり最高のピアノを”という創業者の情熱を受け継いで革新を重ねたスタインウェイのピアノづくりは、ゆるぎないスタインウェイシステムとして確立されました。スタインウェイピアノは150有余年の歴史を通じて昔も今も世界の偉大なピアニストたちに選ばれ続けています。そしてスタインウェイは、なお革新の心を弛めることなく、その設計思想に現代テクノロジーを駆使した研究開発の融合を試みて、全く新しいピアノ、ポストピアノならびにエセックスピアノを創出しました。

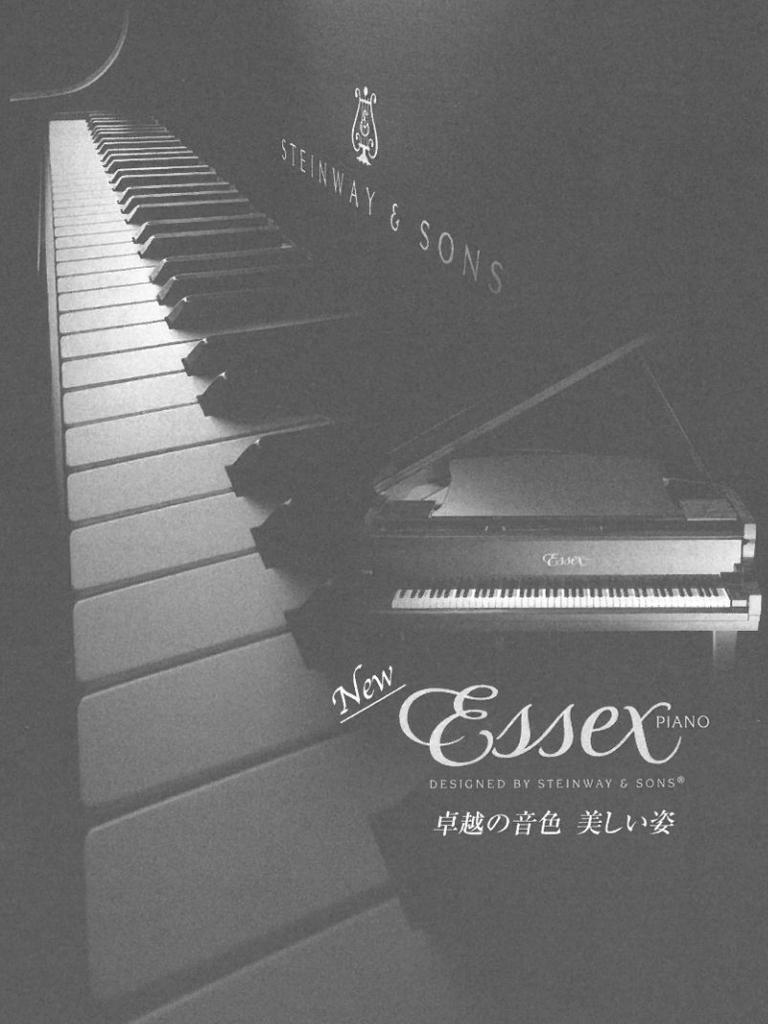
今、スタインウェイ、ポストそしてエセックスピアノは、スタインウェイ“デザイン(設計)”のピアノとして、それぞれに固有の特長をもって、ピアノ音楽とともにある全ての方々のご要望に幅広くお応えしようとしています。

*the Family
Steinway
Designed
Pianos*



Boston
PIANO
DESIGNED BY STEINWAY & SONS®

豊かな音量感 鮮明なサウンド



New
Essex
PIANO
DESIGNED BY STEINWAY & SONS®

卓越の音色 美しい姿

スタインウェイジャパン株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋1-1-15 物産ビル別館8F Tel:03-5251-6550/Fax:03-5251-9585 <http://www.steinway.co.jp>



Chopin

|| *National Edition*

Mendelssohn

|| *Breitkopf New Edition 2006*



TOKYO NEW CITY ORCHESTRA

東京ニューシティ管弦楽団
第51回定期演奏会

2007年6月8日(金) 19時開演

東京オペラシティ コンサートホール

Tokyo Opera City Concert Hall Takemitsu memorial

主催:東京ニューシティ管弦楽団

後援:社団法人 全日本ピアノ指導者協会

Program

第51回定期演奏会

芸術文化振興基金助成事業

指揮:内藤 彰 Conductor: Akira Naito

ピアノ:河合 優子 Pianist: Yuko Kawai

コンサートマスター:浜野 考史 Cocertmaster: Takashi Hamano

フレデリック・ショパン Frédéric-François Chopin (1810-1849)

ポーランド民謡の主題による幻想曲 イ長調 op.13

Fantasy on Polish Airs in A major op.13 (15')

*ピアノ協奏曲第1番—ナショナル・エディションと旧来の版との違いについて他一解説 内藤 彰(10')

ピアノ協奏曲第1番 ホ短調 op.11

《ナショナル・エディション》

Piano Concerto No.1 in E minor op.11 《National Edition》(40')

第1楽章 アレグロ・マエストーソ I. Allegro maestoso

第2楽章 ロマンツェ(ラルゲット) II. Romance (Larghetto)

第3楽章 ロンド(ヴィヴァーチェ) III. Rondo (Vivace)

— i n t e r m i s s i o n —

フェリックス・メンデルスゾーン Felix Mendelssohn (1809-1847)

交響曲第3番 イ短調 op.56 「スコットランド」

《ブライトコップ新版2006》

Symphony No.3 in A minor op.56 "Scottish" 《Breitkopf new edition 2006》(35')

第1楽章 アンダンテ・コン・モート〜アレグロ・ウン・ポーコ・アジタート I. Andante con moto~Allegro un poco agitato

第2楽章 ヴィヴァーチェ・ノン・トロppo II. Vivace non troppo

第3楽章 アダージョ III. Adagio

第4楽章 アレグロ・ヴィヴァチッシモ IV. Allegro vivacissimo

※「ポーランド民謡の主題による幻想曲」は、オーケストラの楽譜の校訂作業が間に合わなかったため、ピアノのみナショナルエディションにて、オーケストラは旧版で演奏いたします。

19世紀前半に活躍しましたショパンの数々の素晴らしい作品は、当時の他の大作曲家の楽譜と同様、素晴らしい作品の宿命とも言うべき様々な誤りを含んだ多くの版の汜濫状態のまま20世紀を迎えました。

この状況を憂いたポーランド政府は、国の威信をかけてピアノリストで首相も務めたパデレフスキーの名を冠した大改訂作業にとりかかりました。この作業は20世紀半ばに「パデレフスキー版」として一応の完成を見、その後半世紀の間、一番信頼のおける版として世界中に普及していきました。

しかし当時の改訂作業は、問題の部分で、数ある異版のうちどれをいかなる理由で選択したのか等の根拠に乏しいものが多く、それゆえ誤りも多く含まれたままの出版でした。そのためポーランド政府は、全集完成後時間をおかずに再改定作業をポーランドの国家事業として行うことを決めざるをえませんでした。

そしてさらに半世紀をかけ、パデレフスキー版よりはるかに多い資料を基に、それらの信頼性を吟味、検証したより正しい、よりショパンの意思に近い全集として今私たちの前に「ナショナル・エディション」の名で登場してきたのです。ショパンを愛するものとして大変幸せな出来事です。

ところで具体的にはいったいどこがどう変わったのでしょうか。まずは、今この楽譜屋さんでも手に入るようになった「ナショナル・エディション(エキエル版)」の譜面をお買いになり、今までの旧版と見比べてみられることをお勧めしますが、大雑把に言いますとピアノソロ部分の違いの多くはアーティキュレーション(どの音符からスラーが始まりどの音符で終わるか等)の違いや、>、sfのある無しやその位置の移動、タイがあった所がなくなり、次の音符を弾き直す、♪2つか1つが付点音符になるのかならないのか等々数え切れないほどあります。

その中で一番衝撃的な違いは3楽章の139小節冒頭の左手の音程が、g₁→g₂ #に変更されたことでしょう。聴き慣れないため一瞬ミスタッチかと思われるかもしれませんが、でもそれは今までのイメージがあるからで、この音に慣れればそれが自然に聞こえ

てきますから不思議なものです。

この変更について簡単にお話します。もちろん例外もたくさんありますが、一般的にショパンの譜面の出版過程の多くはフランスの出版社がリードし、初版も他より早く、しかも多くの場合ショパン自身がそこに立ち会っていました。

それに対し、ドイツ初版譜の多くはフランス初版譜の明らかな誤りを訂正した他に、ショパンの意思とは必ずしも関係無く多くの変更を加えていきました。この音程の変更も特別な根拠も無く唐突になされたものであります。しかし諸事情によりパデレフスキー版等多くの版がドイツ版を基にして出版されて(パデレフスキー版は自筆譜を参考に云々と書いてあっても実際はそうでない場合が多かった)いったため(日本版はさらにこのパデレフスキー版を基に作られている)問題が大きくなってしまいました。

したがってこの箇所では当然本来ショパンが書き、その印刷譜に目も通したg₂ #が正しいとされなければならないのです。他にも類似箇所が数箇所ございます。

次にオーケストラ部分に関しまして説明いたします。

これに関しましては諸説紛々ですが、まず確実なことはショパンの作ったオーケストラ用の譜面は現存せず、今までの譜面は伴奏ピアノ用に作った現存する自筆譜を基に、他人が間に合わせにオーケストレーションしたものであるということです。元々本人は一度も完全なオーケストラ用の楽譜を作らなかったのではとの説もあります。

今回は、自筆譜に残されたショパンの楽器指示や、他の作品のオーケストラの書き方その他多くの資料から、より本来のショパンの意思に近いオーケストレーションが完成しました。一部前奏のハーモニーまで変わっているところがありますが、主な訂正として、受け持つ楽器の変更、弦楽器の余分なトレモロの削除、タイを無くして音を打ち直す、アクセントや強弱記号の位置の移動、フレーズの訂正等が挙げられます。

演奏法としてはメンデルスゾーンの項で説明しますピリオド奏法を用いて、当時の雰囲気にな近づけたく思っております。

MENDELSSOHN 「メンデルスゾーン」交響曲第3番」の演奏スタイルについて

今回はチラシにもお書きしましたように、メンデルスゾーンが活躍していた当時の楽器の演奏法(ヴィブラートがほとんどかからない、そしてその分弦楽器の場合は右手の独特な弓使いにより絶妙なニュアンスを出す奏法で、それぞれの時代に行われていた奏法という意味で、通常ピリオド奏法と呼ばれている)にできるだけ近づけ、その奏法が醸し出す独特な響きによる、軽い活き活きとしたメンデルスゾーンをお聴きいただきたいと思っています(本日はショパンも同様な演奏法をしています)。

現在、オーケストラの奏法の主流を占めています、常時ヴィブ

ラートをかけ続け、長めの音符に重みと潤いを持たせる皆様おなじみの演奏法は、メンデルスゾーンが亡くなって数十年経った20世紀になってから徐々に流行りだし、現在のように世界中のオーケストラの演奏スタイルとして定着するようになりました。

言い換えればロマン派のころまでの作曲家は現在のオーケストラの響きは全く知らずに作曲していたことになります。

ロマン派時代までとはすっかり変わってしまった現在の奏法は功罪様々ですが、古典派や少なくともメンデルスゾーンのような前期ロマン派の作品にとっては残念ながら「功少なくして罪多し」

と言わざるを得ません。そもそもその当時の響きには、現在表現方法の一つとしてよく使われる、遅く重々しいヴィブラートをいっぱいかけた充実した響きなどほとんど存在しなかったといっても言い過ぎではないでしょう。

現在の奏法が流行りだしてから今日までの約100年間、演奏スタイルの変遷とともに、この曲から受けるイメージは作曲当時のメンデルスゾーン自身が描いたものからはどんどん遠ざかっていきました。

しかもそのメンデルスゾーンの意図していなかった現在の演奏スタイルが、不思議なことにいつの間にかあたかもメンデルスゾーンの意図する正統なドイツ音楽のスタイルであるかのように言われるようになってきたのです。

例えば1楽章の序奏部分はAndante con moto で ♩=72と書いてあります。これは「適度に緩やかなテンポで活き活きと動きを持って、1分間に72拍分の速さで」といった意味ですが、メンデルスゾーンとしては、当然当時の演奏法が醸し出す軽やかなすっきりした演奏をイメージして書いていました。

ところが現在、演奏スタイルが全く変わってしまい、ヴィブラートをいっぱいかけて一つ一つの音符をたつぷりと演奏するようになるにつれ、どの演奏もその演奏法に合ったテンポを模索するようになり、結果として短調であることも手伝って平均 ♩=50前後の重々しい、葬送行進曲の序奏部分のようにして演奏されるようになってきました。

現在ではそのメンデルスゾーンの願いをあざ笑うかのようなテンポと表情による重々しい演奏があたかも作曲者の意図であるかのように扱われています。

このようにオーケストラの演奏法が変わってしまいますと、その響きに合った、作曲家の意思とは無縁な解釈が自然に編み出され、それがその曲の演奏法として長年の間に定着してしまうことが多々ございます。この曲などはその典型的な例ですが、他にも私たちが日常親しんでいるベートーヴェンやモーツァルト等名曲の多くがこのパターンに当てはまっているのです。

幸いベートーヴェンやモーツァルトなどはすでに世界的に演奏法の見直しが始まっており、昨年はNHK交響楽団も初めて演奏法を見直して話題になりました。

本日はそれを前期ロマン派にまで広げたものとお考えください(実際は後期ロマン派までも同じことが言えます)。

メンデルスゾーンは、当時まだ最新機器であったメトロノームの数字に誤りがあってはならないと、自分のメトロノームと出版社のそれとを比べて同じであることを確認するなど、自分のイメージするテンポに対し大変神経質であったことが資料に残っています。

この序奏部分はスコットランドのある荒廃した宮殿に立った時のインスピレーションがきっかけで作曲を始めたと言われてます。その隣には廃墟になった由緒ある教会の礼拝堂があり、彼はその場所にまつわる過去の数々の有名な伝説に思いを馳せ、「人々が遠くから心を込めて歌っているコラールが聞こえてくるように」との思いで最初の16小節を作曲しました。かつてメンデルスゾーンがバッハのコラールをオルガンで演奏した時に

成功したオルガンの音色の使い方を、各木管楽器やヴィオラに託して。

上述のように現在のオーケストラ演奏法で演奏した場合、♩=50前後の葬送行進曲調がその響きにぴったりなのですが、メンデルスゾーンが親しんでいた当時の演奏法で、彼の意思どおりのテンポとイメージを守って演奏した場合どのように変身するか、どうかご期待ください。そのイメージの違いに驚かれるかもしれません。

3楽章も全く同じことが言えます。Adagio ♩=76と書いてありますが、現在の演奏法による習慣として大半の指揮者が ♩=50~60で重々しくどっしりと歌わせています。

このテンポ設定もやはり同様にメンデルスゾーンのイメージとは違う現在の奏法にとってぴったりな感じがすることが、メンデルスゾーンの厳密なテンポ指示を無視することにつながってしまったのでしょう。

それともうひとつの要因としてAdagioの意味の取り違えも無視できません。すなわちAllegroは「速い」という意味ではなく「明るい、元気な」という意味であるように、Adagioは「遅い」と言う意味ではなく、当時イメージされていた元々の意味合いは、「気楽に、くつろいで、ゆとりを持って」なのです。

つまり当時の作曲家は、発想記号をテンポ表示としてではなく、その言葉が持つ本来の意味合いを曲頭で示すことにより演奏者に正しいイメージを与え、そのイメージを表現する具体的な手段としてメトロノームの数字を重要に考えていたのです。

言うまでもなくメンデルスゾーンがイメージしていたはずの音楽は、当時の奏法が醸し出す音色による、♪=76の気楽でくつろげる(Adagio)、今よりもずっと速めに奏でられるカンタービレ(メンデルスゾーンの指示)でした。

4楽章はメンデルスゾーン自身が戦場の勇者の姿と表現し、終曲部分は戦いの勝利を祝う男声合唱が気品高く、力強く、勇ましく、堂々と聴こえてくるようにと手紙に記しています。

この部分も慣習になっている遅い重いテンポではなく、ピリオド奏法ならではの軽い響きとメンデルスゾーンの望んだテンポ(♩=104)で、勝利の賛歌を高らかに歌い上げたいと思っております。

その他テンポの速い部分も含め、本日はすべて作曲された当時の演奏法に近い奏法で彼の意思にできる限り忠実に演奏いたします。

ショパンの協奏曲も含めロマン派でのこの奏法の試みは日本のオーケストラとしては今日がおそらく初めてとなるでしょう。

皆様の中にはこの曲に対する今までのご自分の確固たるイメージがおありで、本日の音色やテンポにはどうしても違和感を覚えるという方もいらっしゃるかと推察します。

しかし私はそういう方々にも近い将来、作曲家がイメージして楽譜にその思いを込めた本当の演奏スタイルを、必ずご理解いただける日がやってくると信じ、大変僣越な言い方で申し訳ございませんが、今後もこの路線で作曲家の意思を皆様に発信していくメッセンジャーとして活動していきたいと思っております。

皆様のお耳に本日の演奏が新鮮な響きとして受け入れられましたら幸いです。

音楽監督 内藤 彰

ナショナル・エディション、 National Edition 17年の思い 河合 優子 Yuko Kawai

私のポーランド留学と、ナショナル・エディションでショパンを弾くようになったのとは同時期で、1991年の春のことです。体制が変わってまだ日の浅かった当時のポーランド。留学生の私にも「激動の日々」であることが普段の生活からひしひしと感じられ、ただ夢中で一生懸命に生きていました。今も当時を思うと言いようもなく懐かしい気持ちがこみ上げます。

初めてエキエル教授にお会いしたのは留学する1年前の1990年4月で、日本でショパンのソナタ第3番口短調の全楽章を聴いていただきました。ひととおり弾き、その後レッスンを細かく始めると、先生は優しく微笑んで「実はパデレフスキ版には問題が多いのです」と、私の持参したパデレフスキ版の楽譜に「ショパン本人はこう書いています」と赤いボールペンで訂正を入れ始めました。それが驚きを通り越してショックでもあったことを思い出します。

留学するとすぐに、まずメカニックの根本、コンサートピアニストとしての技術を学び直すことができました。そしてピアノを弾く人間にとって技術とは、楽譜とは、記譜法とは、楽器とはなにか、私たちの体にはなにかができるのか。西洋とは、音楽とはなにか。これらのすべてを統括して考えられるよう導いてくださり、楽譜の枝葉末節のみにとらわれることなく、その根本から全体を学ぶことができました。

ショパンの本質に近づきたいと考えるとき、ショパンの書いたこと、思っていたこと、ショパンの望んでいたことを私たちは知りたいと思います。そのための拠り所となるのが楽譜です。しかし楽譜という平面・2次元に音楽を記録することには限界があります。音楽には楽譜に書けないことがたくさんあるのです。でも、だからこそ本当によい楽譜を使うことが重要なのだと思います。

どの版にもそれぞれの存在価値があります。でもその水準はばらばらで、とても大きな差があります。例えば、ショパン以外の人によって変更されてしまった箇所が人々の想像する以上に多く混じっている版。この版を楽譜売り場で手にとって開き、変えられてしまった箇所をすぐに見分けるのは容易なことではありません。変更箇所が色分けしてあるわけでもなく、証拠となる自筆譜・筆写譜・初版などの「原資料」をすぐに参照できる状況には現在ないためです。ですから問題が大きくても、それほど実感することがない。よくない版を具体的に見抜けない。そのためもっとも大切な「ショパンはどう書いているか」という事柄と深く向き合うことなく、単に現在手に入る版同士だけを見比べて議論するという状況に陥る人も少なからずいらっしゃるのだと思います。

版と版とを見比べるプロセスは早い段階で突き抜けるべきで、その先に、いい演奏をするためにはもっともっと重要な過程が待っている。見比べることは楽譜の目的ではないわけで、音楽に感動し、その音楽を再現するために楽譜がある。「ショパンはどうであったか」を知ることがもっとも大切で、それなしには本質を見失い、時間を無駄にすることになりかねません。

本日演奏する協奏曲第1番は自筆譜が残念ながら失われており、初版をはじめとする原資料から編集されています。ナショナル・エディションに基づいてすでに フランス・ブリュッヘン指揮・18世紀オーケストラやシンフォニア・ヴァルソヴィアをはじめとするオーケストラが演奏しています。作品13の「ポーランド幻想曲」についてはオーケストラスコアがまだ編集・出版されておらず、本日はピアノパートのみがナショナル・エディションで演奏されます。

ショパンは生きておらず、ショパン本人に確認することが私たちにはできません。ですからショパンの完全な原典版の全集というものは存在しませんし、これからも永遠にできないでしょう。

それならどうしたらよいか。その点、真正面から全力で向き合っているのがナショナル・エディションだと思います。人間の心に対する深い思いやりが楽譜編集にこれほど大切なことだったのかと人々に気づかせてくれるのです。白黒がはっきりしない場合どうしたらよいか、ひとつに絞れない場合どうしたらよいか。常に時期的に最後のものを採用すれば本当によいのかどうか。ありとあらゆる問題点に考え得る限りの誠実さを持って、原資料からそれぞれのケースごとに異なった最適のアプローチをする。17年この楽譜を使ってきた私は、年月が経つごとに、よい楽譜のもつすばらしさ、思いやりの心と深い洞察力から生まれる高い水準と、人生の貴重な時間を有効に使えるありがたさを痛切に感じています。

もし編集者が「おそらく間違いだろう」「これではおかしいから」と(勝手に)変えてしまったら、そこに潜んでいるショパンの重要なメッセージが失われてしまうかもしれない。意味やニュアンスが変質してしまうかもしれない。そのような危険があるため、誠実な編集者は「もしかしてこれはショパンの間違いか?」と思うようなところがあったとしても、安易にわかりやすくしたり、ごく常識的な響きに変えたり、といったことはしないのです。

そして重要なのは、エディションありきではなく、ショパンが大切で、音楽が大切で、音楽の感動が大切だということです。今日のような演奏会の企画は、作曲家への深い尊敬の気持ちなしには生まれません。企画し招いてくださった東京ニューシティ管弦楽団のみなさまに心から感謝いたします。

PROFILE



指揮:内藤 彰 Akira Naito (Conductor)

名古屋大学理学部卒業。在学中より指揮を山田一雄氏に師事する。桐朋学園大学研究科(指揮専攻)にて、小澤征爾氏、秋山和慶氏、尾高忠明氏他に師事し、修了後(社)山形交響楽団の専属指揮者を3年間務める。これまでに新日本フィル、東フィル、東響、新星日響、シティフィル、神奈川フィル、名フィル、九響他、日本の多くの主要オーケストラを指揮。1990年東京ニューシティ管弦楽団を設立。

海外では、1991年ベオグラードフィルを指揮、1992年には、モスクワ音楽院大ホールにて、モスクワ交響楽団を指揮し、ロシア音楽の魂を日本人から教えられたと絶賛された。その後1996年5月、ロシアの国立ヴァローニッシュ歌劇場にて、『セヴィリアの理髪師』を、1997年5月には、ベラルーシ国立歌劇場にて『蝶々夫人』を指揮。また2001年3月セントペテルブルグ・カベラ交響楽団、2002年5月ロシア国立ウリヤノフスク・アカデミー交響楽団に客演し、新聞各紙に大きく取り上げられた。2001年12月北ハンガリー交響楽団、2002年7月ミラノスカラ座フィルのメンバーを中心とする州立ロンバルディア室内管弦楽団の北イタリアツアーを、2003年3月にはメキシコ州立交響楽団を指揮。

2004年1月に行なわれた歌劇『蝶々夫人』の公演にて、作曲家プッチーニの強い願いにもかかわらず初演以来一度も使われてこなかった、日本の伝統的‘かね類’(寺の釣鐘の音、お椀型のキン、風鈴他)に、12音の音程を持たせ‘楽器’として特注創作、それにより作曲者の願う本当の『蝶々夫人』の世界初演に成功し、音楽界の話題となった。更に2004年7月には、イタリアのプッチーニ・フェスティバルにおいて、この鐘が使用され、地元の新開・テレビに大きく取り上げられた。

’04年9月には、ブルックナーの交響曲第8番のAdagio楽章の新稿を、楽譜を起こすところから関わり、世界初演を果たした。この“ブルックナー新稿の世界初演シリーズ”の話題は、多くの新聞、音楽雑誌を賑わすのみならず、ライブ録音のCDも、「レコード芸術」誌他で、非常に高く評価されている。また、日本初のブライトコップ新版によるベートーヴェン交響曲チクルスも大いに注目を集めた。現在、東京ニューシティ管弦楽団、及びプロ混声合唱団「東京合唱協会」音楽監督・常任指揮者。日本指揮者協会幹事。



ピアノ:河合 優子 Yuko Kawai (Pianist)

名実ともに日本を代表するショパンのスペシャリスト。ナショナル・エディションによる、ショパンの2曲のピアノ協奏曲1台ピアノヴァージョン(ショパン自身による)、コントルダンス 変ト長調、などの世界初演者。2001年より世界で初めて、ナショナル・エディションに基づくショパン全曲演奏会(一人のピアニストによる)を行っている。

ポーランド国立ワルシャワ・ショパン音楽院研究科修了。1995年10月、第13回ショパン国際ピアノ・コンクールでは著名な批評家ヤヌシュ・エキエルトが発表した評論「スターは消えてゆく」およびポーランド国营ラジオ第一放送がコンクール直後に彼女を取り上げた30分の特別レポート番組が大きな反響を呼び、翌年のポーランド全国リサイタル・ツアーをきっかけに演奏活動に入る。

各国オーケストラと協演、ヨーロッパの数多くの国際フェスティバルに招かれ放送出演も多数。「スラヴの魂を持つ日本人」「ユウコ・カワイの演奏会は真の芸術的イベントであった」などの評を得る。

99年ベアルトン・レーベル(ポーランド)のナショナル・エディション・ディスク全集に東洋人として初参加、外国人シリーズ第1弾『レント・コン・グラン・エスプレッシーオーネ』をリリース。各国で好評を得る。月刊『ショパン』では「聴いておきたい名盤CD」に選ばれた。

第1~5回ショパン国際ピアノ・コンクールin ASIA(99-03)、第5・6回アルトゥール・ルービンシュタイン記念青少年国際ピアノ・コンクール(02、04年)、第37-39回ポーランド・ピアノ・フェスティバル「若者のステージ」(03-05年)審査員。

01年より長期プロジェクト《河合優子Chopinissimoシリーズ》を開始。ショパン全曲網羅のマスタークラスおよびナショナル・エディションに基づく全曲演奏会を、出身地の岡崎を柱として、東京(浜離宮)他全国で定期的におこなっている。

02年12月、05年7月の東京公演は大成功を収め、「音楽の友」誌他で絶賛された。04年には2枚目のCD「バラード(全曲)／即興曲集」(PLATZ)をリリース。レコード芸術、音楽の友、日経新聞等で高く評価された。

浜離宮朝日ホールでの全曲演奏会を収録したライブCD(Chopinissimo I)もレコード芸術準特選、文化庁芸術祭参加作品として高い評価を得て、その後、シリーズとして次々と発表している。

百瀬雅恵、大堀敦子、ポト・レヘル、ヤン・エキエルの各氏に師事。

TOKYO NEW CITY
TOKYO NEW CITY
ORCHESTRA



東京ニューシティ管弦楽団は、1990年、音楽監督・常任指揮者に内藤彰を擁し設立された。定期演奏会の他、名曲コンサート、オペラ・バレエとの共演、音楽鑑賞教室、レコーディングなど幅広く活躍。年間5回行われている定期演奏会では、古典奏法も加味したブライトコップ新版によるベートーヴェン交響曲チクルスの他、新しく発見されたブルックナーの楽譜使用など、斬新な内容は高く評価されている。

オペラの分野では特に評価が高く、二期会、藤原歌劇団のオペラ公演の他、レナータ・スコット、アルフレード・クラウス、ヘルマン・プライ、ルチアーノ・パヴァロッティ、カルロ・ベルゴンツィ、アグネス・バルツァ等世界で活躍するオペラ歌手との共演も数多く、聴衆や批評家のみならず、世界の著名オーケストラと共演している彼らからも、心からの絶賛の言葉を贈られている。バレエの分野では、国内の主要バレエ団の他、英国パーミンガム・ロイヤルバレエ団、ミラノスカラ座バレエ団、シュツットガルトバレエ団、モンテ・カルロバレエ団、ロシア国立レニングラードバレエ団等海外からのバレエ団の日本公演にもこれまで数多く出演し、公演をサポートする誠実で質の高い演奏が毎回非常に高い信頼と評価を得ている。また、桂三枝、江戸家小猫、三枝成彰、中島啓江等を迎えてのファミリーコンサートや、Jリーグ・アウォーズ、さだまさしツアーなどポピュラーの分野でも、大変評判がよく、多くの方々から親しまれている。2006年(社)日本オーケストラ連盟加盟。

今年創立17年を迎える東京ニューシティ管弦楽団は、昨年4月、なおいっそうの飛躍を願って、「有限責任中間法人」として法人格を取得し、さらに(社)日本オーケストラ連盟に東京第9番目のオーケストラとして加盟いたしました。ひとりでも多くの方々にオーケストラの魅力をお伝えすべく、理事・評議員そして楽員、スタッフ一同、努力してまいります。皆様、どうぞ一層のご支援をお願い申し上げます。

東京ニューシティ管弦楽団理事会

- 理事長**：三善 清達 (評論家、元東京音楽大学学長)
専務理事：内藤 彰 (東京ニューシティ管弦楽団音楽監督)
常務理事：杉山 繁三 (東京ニューシティ管弦楽団営業顧問)
理事：家永 勝 (日本音楽プロデューサー協会代表幹事)
 石田 一志 (くらしき作陽大学音楽学部長)
 岡村 喬生 (オペラ歌手)
 竹腰 里子 (北区合唱連盟理事長)
 佐藤 幹一 (東京学芸大学名誉教授)
 田中 千香士 (東京芸術大学名誉教授)
 新実 徳英 (作曲家)
 松村 禎三 (作曲家)
 作田 忠司 (東京ニューシティ管弦楽団事務局長)

- 評議員**：神田 正美
 (音楽プロデューサー・東京ニューシティ管弦楽団顧問)
 斉藤 明 (オズミュージック代表取締役)
 丸岡 努 (フレンドシップ・コンサート・ジャパン代表)

賛助会員

- 石本 務
 白井 孝介
 木村 好次
 小池 常隆
 小出 三郎
 富野 光太郎
 内藤 郁雄
 渡辺 大雄

株式会社 MOT・ジャパン

御協力企業

- 株式会社 北里楽器
 NPO法人 ザ・シチズンズ・カレッジ
 千秋オフィスサービス 株式会社
 はっくるべりい
 クラシック音楽鑑賞店 バロック
 株式会社 武蔵野楽器
 ラ・プリムール

〈五十音順・敬称略〉

東京ニューシティ管弦楽団 後期3公演定期会員・賛助会員募集(サポーターズクラブ)

9/21(金) カリンニコフ・11/21(水) ブルックナー・2008.3/21(金) シベリウス 19:00~東京芸術劇場

■定期会員 (S会員 A会員 B会員) ※お得なこの制度を是非ご利用ください。(毎回同じ席にお座り頂けます。別途ご希望も承ります)

	S会員		A会員		B会員	
	シングル	ペア	シングル	ペア	シングル	ペア
会費(3公演)	14,000円	22,000円	10,500円	16,800円	7,500円	12,000円
1公演あたりの単価	4,666円	3,733円	3,500円	2,800円	2,500円	2,000円
定価	6,000円		4,500円		3,000円	

〈+さらにお得なシステム〉

- ゲスト割 会員様がお連れ様のために追加チケットをお申し込みの場合、20%引きでご購入いただけます。
- 振替制度 年間1公演のみ、ご都合のつかない公演のチケットを、別の公演のチケットにお振替いたします。ご家族・お友達と一緒にご来場ください。
- プラチナ会員(賛助会員) 年会費 1口10万円 プログラムにご芳名を掲載 定期演奏会のプラチナ席に毎回2名様ご招待
- ゴールド会員(賛助会員) 年会費 1口5万円 プログラムにご芳名を掲載 定期演奏会のプラチナ席に毎回1名様ご招待
- 友の会(会費無料) ☆東京ニューシティ管弦楽団の演奏会のご案内・CDの割引案内等をお送りさせていただきます。友の会会員の方には全公演のチケット(学生券を除く)を10%引きにて販売いたします。

お申し込み お問い合わせ 有限責任中間法人 東京ニューシティ管弦楽団 事務局 Tel:03-5933-3222 Fax:03-6766-3782 E-mail:info@tnco.or.jp http://tnco.or.jp 〒178-0063 東京都練馬区東大泉3-22-15 シンフォニー・プラザ2F ・サポーターズクラブ、エコノミープランのお申し込みは、東京ニューシティ管弦楽団事務局へお願いいたします。

- 音楽監督・常任指揮者 内藤 彰
- 首席指揮者 曾我 大介
- コンサートマスター 鈴木 順子
- 客員コンサートマスター 浜野 考史

■事務局

- 事務局長 作田 忠司
- 事務局次長 渡辺 晶子
- 営業顧問 杉山 繁三
- スタッフ 相吉澤 絵里 木村 有美子 鈴木 光子 高松 順子 高松 正典 古屋 修 堀口 佐知子 松本 敬子 山本 ふさこ

ヴァイオリン

- 荒巻 泉
- 伊東 佑樹
- 上田 博司
- 大竹 奏
- 岡田 邦子
- 小澤 郁子
- 栗原 りか
- 剣持 由紀子
- 小島 光敬
- 笹井 飛鳥
- 高階 久美子
- 徳井 えま
- 富山 ゆりえ
- 中川 さと子
- 中澤 真理子
- 中村 朱見
- 山江 洋子
- 山川 奈緒子(*)

ヴィオラ

- 桜井 多美子
- 浅川 文
- 宇佐美 久恵
- 尾台 和佳
- 久郷 寿実子
- 竹鼻 江美子
- 堀江 冬子
- 松田 美奈子

チェロ

- 齋藤 章一(*)
- 大島 純
- 葛西 英一
- 富成 倫子
- 船田 裕子
- 星野 敦
- 望月 直哉
- コントラバス
- 徳高 宏行(*)
- 青山 幸成
- 照井 岳也

フルート

- 井ノ上 洋(*)
- 丸田 悠太
- オーボエ
- 徳田 振作(*)
- 池田 祐子
- クラリネット
- 西尾 郁子(*)
- 松元 香

ファゴット

- 藤田 旬(*)
- 松里 俊明
- ホルン
- 飯島 さゆり
- 小川 正毅(*)
- 上久保 奈津子
- 松浦 光男
- 源 真理
- トランペット
- 中西 清一(*)
- 小野 美海
- 後藤 慎介
- 平林 徹
- 依田 泰幸

トロンボーン

- 伊藤 吉隆
- 恵藤 康充
- チューバ
- 松下 晃一
- 打楽器
- 藤城 佳之(*)
- 大河原 涉
- 辻本 洋一

ハーブ

- 平島 さより
- 平山 葉津子
- ステージマネージャー
- 青木 勝弘
- 土井 輝郎
- ライブラリアン
- 古市 尚子

○印は首席奏者 *印はパートインスペクター